

はじめに

われわれの出発点である「身体芸術論研究 I」は、静岡文化芸術大学（以下、SUAC）とボローニャ大学の共同研究としてはじまった。2011 年度の SUAC 学長特別研究として採択され、研究代表者である梅若猶彦教授が、ボローニャ大学で能楽・現代劇ワークショップを開き、アマチュアの学生たちを指揮し、僅か5日間の準備期間ののち、自作の現代劇『イタリアン・レストラン』の公演を成功させた（2011/11/10、於・ボローニャ大学ラボラトリー、画像1）。また国際シンポジウム「新たな能—非連続の連続」（2011/11/10、於・総合芸術学科）に、研究分担者の土肥と共に参加した（画像2）。ここでの報告集は、2012年3月にボローニャ大学出版局から、ボローニャ大学と静岡文化芸術大学の共同出版で発刊された（画像3）。シンポジウムと報告集を通じて、ボローニャ大学のジェラルド・グッチーニ教授は東西の中世劇にみられる儀式性、マッテオ・カザーリ講師は東洋の伝統演劇における秘伝と口伝、ジョヴァンニ・アッザローニ名誉教授は歌舞伎と能の様式性、ヴェネツィア大学のボナヴェントゥーラ・ルベルティ教授は明治以降の新作能の系譜、日本文学の翻訳家のリディア・オリリア氏は三島由紀夫の『近代能楽集』の斬新さ、土肥は逆説的な能の身体性、梅若教授は虚構としての身体性について論じた。

国際シンポジウム第2弾は、2012年度の静岡文化芸術大学学部長特別研究「身体芸術論研究 II」の一環で、2012年10月19日、今度は静岡文化芸術大学において「見えるものと見えないもの—能をめぐる」と題し開催された（画像4）。梅若教授は不可視を可視化する能楽（ひいては演劇全般）のパラドクスについて論じ、カザーリ講師は『風姿花伝』を例に「見えないもの」を扱う演者の役割について検討した。高田和文教授は能が東西の前衛劇に与えた影響についてスポットをあて、フィリピン大学のアンパロ・アデリナ・ウマリ准教授はフィリピンでの能の実践（特に教育目的）について報告した。当冊子はこの第2回目のシンポジウムの報告集である。

共同研究開始から3年目となる2013年、国際シンポジウムの会場はフィリピンとなる予定である。こうした研究者間の交流を軸に、SUACとボローニャ大学、さらにはフィリピン大学との間に学術交流協定が結ばれるよう、われわれは願ってやまない。当プロジェクト内で感知される調和ゆえ、むしろそのようなかたちに実っていくのが自然とすら思える。

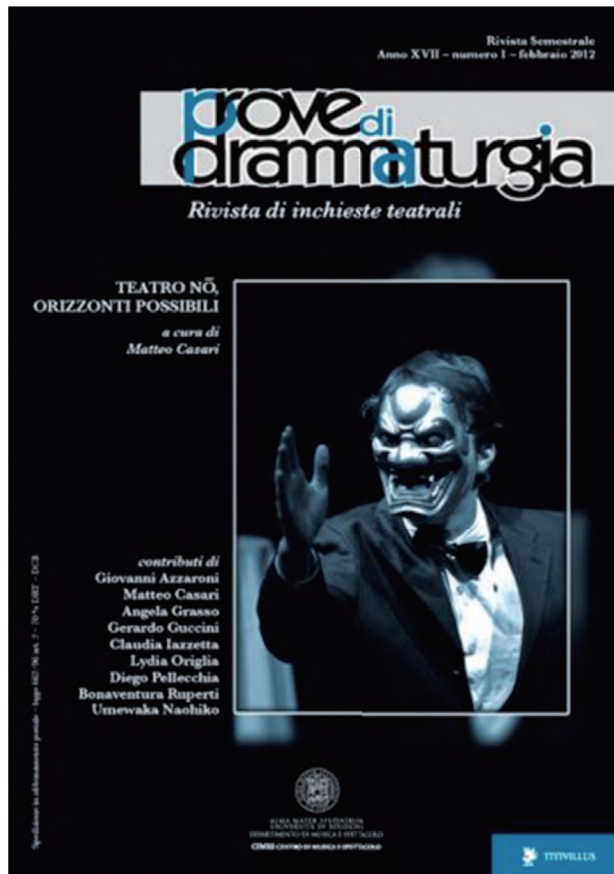
研究グループを代表して 土肥 秀行



画像1 ワークショップ最終日、梅若猶彦作『イタリアン・レストラン』公演（2011/11/10、ポローニャ大学ラボラトリー）



画像2 シンポジウム「新たな能—非連続の連続」（2011/11/10、ポローニャ大学マレスコッティの間）



画像3 2011年シンポジウム報告集(ポローニヤ大学発行の演劇専門誌 Prove di drammaturgia の2012年1月号全体特集)



画像4 シンポジウム「見えるものと見えないもの—能をめぐる—」(2012/10/19、静岡文化芸術大学 278 大教室)